**聖霊降臨節第15主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年8月25日**

**「この町には、わたしの民が大勢いる」**

**イザヤ書41章10節**

 **41:10 恐れることはない、わたしはあなたと共にいる神。たじろぐな、わたしはあなたの神。勢いを与えてあなたを助け／わたしの救いの右の手であなたを支える。**

**使徒言行録18章1～17節**

 **18:1 その後、パウロはアテネを去ってコリントへ行った。**

 **18:2 ここで、ポントス州出身のアキラというユダヤ人とその妻プリスキラに出会った。クラウディウス帝が全ユダヤ人をローマから退去させるようにと命令したので、最近イタリアから来たのである。パウロはこの二人を訪ね、**

 **18:3 職業が同じであったので、彼らの家に住み込んで、一緒に仕事をした。その職業はテント造りであった。**

 **18:4 パウロは安息日ごとに会堂で論じ、ユダヤ人やギリシア人の説得に努めていた。**

 **18:5 シラスとテモテがマケドニア州からやって来ると、パウロは御言葉を語ることに専念し、ユダヤ人に対してメシアはイエスであると力強く証しした。**

 **18:6 しかし、彼らが反抗し、口汚くののしったので、パウロは服の塵を振り払って言った。「あなたたちの血は、あなたたちの頭に降りかかれ。わたしには責任がない。今後、わたしは異邦人の方へ行く。」**

 **18:7 パウロはそこを去り、神をあがめるティティオ・ユストという人の家に移った。彼の家は会堂の隣にあった。**

 **18:8 会堂長のクリスポは、一家をあげて主を信じるようになった。また、コリントの多くの人々も、パウロの言葉を聞いて信じ、洗礼を受けた。**

 **18:9 ある夜のこと、主は幻の中でパウロにこう言われた。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。**

 **18:10 わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ。」**

 **18:11 パウロは一年六か月の間ここにとどまって、人々に神の言葉を教えた。**

 **18:12 ガリオンがアカイア州の地方総督であったときのことである。ユダヤ人たちが一団となってパウロを襲い、法廷に引き立てて行って、**

 **18:13 「この男は、律法に違反するようなしかたで神をあがめるようにと、人々を唆しております」と言った。**

 **18:14 パウロが話し始めようとしたとき、ガリオンはユダヤ人に向かって言った。「ユダヤ人諸君、これが不正な行為とか悪質な犯罪とかであるならば、当然諸君の訴えを受理するが、**

 **18:15 問題が教えとか名称とか諸君の律法に関するものならば、自分たちで解決するがよい。わたしは、そんなことの審判者になるつもりはない。」**

 **18:16 そして、彼らを法廷から追い出した。**

 **18:17 すると、群衆は会堂長のソステネを捕まえて、法廷の前で殴りつけた。しかし、ガリオンはそれに全く心を留めなかった。**

1.

 **「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ。」（9・10節）**

**ある牧師はこの御言葉は「伝道者を活かす御言葉である」と語っています。その牧師は語ります。「田舎の小さな教会で数十年奉仕をした。石地のような田舎町の伝道に疲れ果て、牧師を辞めるか、他の所に移ろうかと考えた時、この御言葉が示され引き戻された。多くの伝道者がこの御言葉で遣わされた地に引き戻らされ、伝道者として立ち直ることが許された」。別の牧師は「全ての牧師は書斎にこの御言葉を掲げておくべきだ」と言われたと聞いたことがあります。**

**どんなに一生懸命説教をしても、伝道をしても、一向に教会に新しい人が来ない。石地に種を蒔くように無駄な意味のないことをしているのだろうか。神様はこの町の人々を救おうとされないのだろうか。この町には主の救いを必要としている人はいないのだろうか。伝道が困難を極める中で牧師もまた教会もそのような思いを抱いてしまうことがあります。**

**「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ。」（9・10節）**

**この町には神の民が大勢いるのだ。神様が救おうとしておられる神の民がいるのだ。まだ神様のことを知らないけれども、神の救いを必要としている人が必ずどこかにいるのだ。だから、恐れずに語り続けよう。どんなに伝道が困難でも主が共にいてくださるから、共にいてくださる主が大きな御業をなしてくださるから、諦めないで語り続けよう。伝道を続けよう。今も多くの牧師がまた教会がこの御言葉によって励まされて力を与えられているでしょう。**

**アテネを去ったパウロはコリントに行きました。このコリントという町はエーゲ海とイオニア海を結ぶ港町で交通・貿易の中心地で非常に栄えていた町です。それと同時に不道徳や不品行で有名な町でした。この当時「コリント風」というと倫理的・性的な乱れを揶揄する言葉だったそうです。**

**その様なアテネの町とはまた違った意味で伝道が難しそうな町にパウロは立ちました。するとこの町でパウロはアキラとプリスキラというローマを退去させられてこの町にやってきた一組のユダヤ人夫婦と出会いました。彼らはユダヤ人キリスト者と考えられています。そして彼らはこの時もそうですし、これから後もパウロを色々な形で助けてくれることになりますし、出来たばかりの教会に献身的に仕える夫婦でありました。その様な思いがけない出会いを神様は与えて下さったのです。彼らはテント造りを職業としていました。パウロも同じ技術を持っていましたので、一緒に仕事をして、それだけでなくパウロは彼らの家に住み込みました。そして、安息日にはこのコリントの町でもユダヤ教の会堂に行きイエス様の十字架と復活の福音を宣べ伝えました。**

**そうしているうちにベレアに残っていたシラスとテモテがやってきました。おそらく彼らはフィリピの教会がパウロが伝道に専念できるようにとの献金を携えてきました。コリントに立った時は一人だったパウロがアキラとプリスキラ、さらにはシラスとテモテという強力な仲間が揃い、経済的にも伝道に専念できる環境が整いました。「よし！これから！」という強く熱い思いがパウロにあったと思います。その思いを抱いてユダヤ人に力強く証ししたのですが、ここでもユダヤ人から口汚くののしられたのです。パウロは「あなたたちの血は、あなたたちの頭に降りかかれ。わたしには責任がない。今後、わたしは異邦人の方へ行く。」（6節）と言って服の塵を振り払ったのです。これはあなたたちがどうなっても私は知らないという意思を表すものです。**

**そこでパウロはユダヤ教の会堂を去り、なんと会堂の隣の家のティティオ・ユストという神様をあがめる異邦人の家に行きそこで伝道し神様を礼拝したのです。パウロに反対するユダヤ人からすると会堂の隣の家で伝道して礼拝するなど許しがたいことだと思います。「十字架につけられて殺されて復活されたイエスこそがキリストである」パウロが力強く説教をする声も讃美の声も祈りの声も隣の会堂に聞こえて来たでしょう。その聞こえて来た声を音を聞いた会堂長のクリスポは一家を上げてイエス様を救い主と信じる信仰へと導かれたのです。そしてクリスポ一家だけでなく多くのコリントの人々が、ほとんどが異邦人だと考えられています、その人々がパウロが語るイエスキリストの福音を聞いて信じて洗礼を受けたのです。不道徳・不品行の町コリント、このような町だから伝道が困難かと思いきや、思いもかけない形で多くの人々が信仰へと導かれてキリスト者になったのです。**

**そのようなある夜にイエス様は幻の中でパウロに語りかけられたのです。**

**「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ。」（9・10節）**

**イエス様のこの言葉は伝道困難な中にあるパウロを励ますため、そういった面も確かにあるかもしれません。しかし、私はこの言葉は何かもっと深い意味の言葉のように思うのです。パウロのコリントでの伝道は困難を極めたというよりむしろ成功しているとも言えるのです。それでも「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。」イエス様がこう言われるということはパウロは恐れを抱き黙っていたということです。いったいパウロは何を恐れて語るのをやめて黙っていたのでしょうか。**

**私はパウロの伝道者としての迷いがここにあったと思うのです。「わたしは異邦人の方へ行く」こう言ってユダヤ人には語るのをやめて異邦人に福音を語るパウロです。そのために多くの異邦人が救われていきます。それはそれで喜ばしいことなのですが、じゃあはたしてユダヤ人には語ることをしないでいいのか。そうかといってユダヤ人に福音を語るとまた迫害を受けるのは目に見えています。**

**パウロはイエス様に出会って回心したとき、イエス様からこのように言われました。**

**9：15「すると、主は言われた。「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。」パウロは異邦人や王たち、さらにイスラエルの子らすなわちユダヤ人に、つまり全ての人たちに福音を告げるために伝道者に召されたのです。その召しを受けてパウロはこれまで伝道に励んできました。ユダヤ人にも異邦人にもイエス・キリストの十字架と復活を宣べ伝えてきました。伝道旅行ではまずユダヤ教の会堂でユダヤ人にもユダヤ教への改宗者にも語ってきたのです。そして多くはユダヤ人たちから迫害を受けてきたのです。**

**ユダヤ人にも異邦人にも福音を伝えたい。それがパウロの伝道者の使命です。でもユダヤ人から迫害を受ける。どうしてこんなに迫害を受けるのか。はたしてユダヤ人に福音を語ることは主の御心に適っていることなのか。ユダヤ人が福音を聞こうとしないから異邦人に語ればいいのか。そのような伝道者としての迷いがパウロにあったのではないかと思うのです。それは福音を語ることへの迷いと恐れがそこにはあると言えるのです。それはさらに主の召しとはいったい何かといった根源的な問いに繋がっていく重要な問題をパウロは抱えて悩みの中にいたと言えると思うのです。**

**イエス様はそのような伝道者としての迷いの中にあるパウロに語りかけられたのです。**

**「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ。」（9・10節）**

**これは「ユダヤ人に私の十字架と復活の福音を語ることを恐れてはならない。私はあなたを異邦人にもユダヤ人にも伝道する伝道者として召したのだ。だからこれまでのように語り続けよ。どんな時にもわたしがあなたと共にいるから。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には私が救おうとしている私の民が大勢いる。だからこれまでのようにユダヤ人にも異邦人にも分け隔てせずに語り続けよ。」そういったイエス様の召しの言葉であり、約束の言葉なのです。**

**このイエス様の言葉がどれほどパウロにとって大きな励ましになったことか。この言葉があったからこそパウロは1年6カ月という長い期間に渡ってコリントに留まり伝道をし続けたのです。主の言葉を約束を信じて伝道者として立ち直ることができたのです。**

**12節以下はイエス様がパウロへの言葉を守って下さっていることの証しの出来事です。ユダヤ人から迫害を受け法廷に引き立てられたのですが、地方総督のガリオンが相手にしないでパウロがユダヤ人の迫害から免れたのです。興味深いのが会堂長のソステネという人物です。彼は先ほどの会堂長クリスポの後任だったのか他の会堂の会堂長なのかは不明ですが、このソステネという人物はコリントの信徒への手紙に出てきます。**

**コリントの信徒への手紙1：1・2の前半。**

**「神の御心によって召されてキリスト・イエスの使徒となったパウロと、兄弟ソステネから、**

 **コリントにある神の教会へ、」と書かれています。**

**この兄弟ソステネが先ほどの会堂長ソステネと同一人物かはわからないところではありますが、もし同一人物であれば、神様はユダヤ人であるソステネをパウロが語る福音によってイエス様を信じるキリスト者としてくださったということなのです。わたしの民が大勢いる、その中の一人として捕らえて下さり、パウロの協力者として豊かに用いて下さったのです。それはパウロがイエス様の召しの言葉であり約束の言葉を信じて、コリントの町で恐れずに福音を語り続けたからです。ユダヤ人たちから迫害されても、そのユダヤ人から救われる者を起こして下さったのです。主がなさる業は人の思いをはるかに超えて本当に素晴らしいと思います。**

**伝道は多くの困難を伴うものです。これをすれば伝道が成功して教会が人で溢れるという簡単な方法はありません。伝道しても伝道しても、福音を語っても語っても一向に人が来てくれないことが多々あります。むしろ伝道することで、福音を語ることで思わぬ迫害に会うこともあるのです。教会の案内やチラシを配っても読んでくれないどころか受け取ってすらくれない人もいます。私がかつてお仕えしていた教会で伝道集会のチラシを入れようとしたらその家の人から怒られたことがあります。その様な中で私たちのしている伝道は主の御心に適っているのだろうかと迷いや悩みが生じることもあるのです。福音を語ることへの迷いと恐れが私たちにも生じることがあるのです。**

**私たち一人一人がイエス様の十字架の死と復活の希望をイエス様の愛を伝えるために召されているのです。「わたしがあなたと共にいる」イエス様はどのような時にも私たちと共に歩んでくださいます。「この町にはわたしの民が大勢いるからだ」諏訪の町に主が救おうとされている神の民が大勢いるのです。主の救いを必要としている民が大勢いるのです。もしかしたら、その人はここに教会があることも知らずに日々歩んでいるかもしれません。主が私たちの思いを越えて働いて下さり大きな御業をなしてくださることを信じて語り続けていきましょう。**